

H-77

がない岡田氏が、新人たち  
に顔と恩を売るいいチャンス  
だったと目されていま

「直接、小沢氏と対決して  
傷を負う仕事は菅・仙谷に  
任せ、自分は彼らの前で必

る覇権争いだった。そして  
項羽が倒れ、劉邦が漢を打  
ち立てると、今度は功臣・

時代も、洋の東西も問わ  
ず、権力闘争の本質に何ら  
変わりはない。暴れる犬が

緊急リポート

政治とは冷徹なものである

民主党代表選の論戦に  
失望したという立花氏

# 立花隆 哀れ小沢一郎、 君の時代は終わった

今回の民主党代表選を見  
ていて、過去にこれとよく  
似た場面があったことを思  
い出した。

32年前、78年の自民党総  
裁選で、現職の総理・福田  
赳夫に田中角栄の支援を受  
けた大平正芳が挑み、一般

戦術は、徹底したローラー  
作戦である。指揮をとった  
後藤田正晴は、党員名簿を

「天の声にもたまには変な  
声がある」と言い、本選を  
辞退して大平内閣が成立し  
た。

今回の、それと同じこと  
が起こるのではないかと思

つていた。

小沢は、全国の選挙区

の支持をとりつけ、それ  
によって国会議員にも雪崩

現象を起こさせて、現職の  
総理をあつさり打ち破って  
しまうのではないかと思っ  
ていた。

ところが、結果はそうは  
ならなかった。小沢は、支  
持する議員たちに、「党員、  
サポーターをどん



W 政 10.10.2

# さあ民主党政権、 さらば小沢と言おう

どん集めろ」

と指示を出し、実際に小沢支持の議員たちは、自分の選挙区の党員・サポーターに手紙を送ったり、支持呼びかけをし、32年前さながらのローラー作戦を行っていた。投開票の直前、小沢サイドからは、「党員・サポーター票で拮抗、議員票では50票の大差が付いている」などの情報が流されていた。それなりのデータもあったのだろう。

しかし実際には、小沢サイドは事前の票読みにも全く満たない票数しか集めることができなかった。党員・サポーター票を号令かけて集めても、結局、事前の新聞各紙の世論調査と同じような割合の票数しか得られなかったし、完勝するはずの議員票でさえ負けた。やるべきことをやって、勝つべくして勝てなかった。

選挙後、小沢陣営からは「裏切り者は誰だ」と犯人探しをする声が上がったとか、選挙が公正に行われたのか疑う声すら出たというが、言い換えればそのくら



い予想外の結果だったということだ。選挙戦の途中から、赤坂の選対事務所にほとんど人の出入りがなくなつたという報道もあった。事実であれば、典型的な負け戦ということだろう。

小沢はこれまで「選挙に強い」と言われつづけ、自らの選挙でも、党首選挙でも負け知らずで来たのに、乾坤一擲の大勝負であつたり負けた。小沢自身、そのシヨックは相当大きいと思う。選挙後の挨拶で、「一兵卒として民主党政権を成功させるために頑張ってきた」と「これからも仲間の一員として、仲良くしてもらえよう心からお願ひする」などと、小沢らしくない弱々しいニュアンスの言葉があつたところに、敗

北の心理的影響の大きさを感ぜさせた。

小沢は、なぜ負けたのか。ひとつには、今回の選挙戦で小沢が語つた言葉の空虚さを、国民が見抜いてしまつたという面がある。なによりびつくりしたのは、投票前の演説(14日)で、小沢が最初に政治とカネの問題で自分が問題を起こしたことを謝罪したこと。これまで繰り返してきた自分にやましいところは何ひとつないという「堂々たるシラ切り」の態度を一変させたこと。あの「シラ切り」を国民が誰一人信用していないというところが世論調査にハッキリあらわれていた。

小沢はそれが自分の最大のアキレス腱であることを自覚して謝罪作戦に切りかえ

たのだろうか、それが裏目に出たと思う。「ウソも百万遍つき通せばウソでなくなる」が信念の小沢が弱気になつて謝罪したとたん、「ああやっぱり」と小沢を見放した議員が少なくなつたと思う。

「マニフェストは国民との約束だ。約束したことは一生懸命守る」「国民の生活が第一」などと口先上手に訴えたが、この1年間の民主党政権を見ていて、昨年マニフェストで公約したこととがほとんど何ひとつ実現されないことに、国民は強い不満を抱いていた。子ども手当、戸別所得補

## 小沢の根っこにあるもの

円高・株安への対策について、本来この問題の本質は円高でなくドル安にある、もつと言えは世界中の通貨が不信認される瀬戸際に来ているという緊急事態なのに、菅・小沢の論戦は

小手先の財政出動や具体的な中身の乏しい対策に終始して、この二人の政治家が

償、高速道路無料化など、昨年掲げたマニフェストの中身は口当たりの良いバラ撒きばかりで、財政の組み換えをすればその財源が出てくるなどという主張は結局何の根拠もないお題目だった。目先の票目当ての、その場しのぎの食言だった。

官僚支配から脱却し、政治主導に移行するとは言つても、その実態は要するに「オレにやらせろ」「オレだけが正しい」というだけのことで、小沢に官僚と論争して、官僚を説き伏せるだけの識見・力量があるかといえばそんなものはないということが分かつた。

目下の経済問題を解決する能力を持ち合わせていないどころか、そもそも問題の所在さえ正確に把握していないことを露呈した。

沖繩・普天間の米軍基地移設についても、小沢は、「知恵を出せば必ず納得いく案ができる」と言いながら、細かく問い質されると

警察小説史上類を見ないヒーローが誕生した!

## 世田谷駐在刑事

警察のすべてを知る  
菅首が放つ「超」刑事小説

濱嘉之

講談社  
定価1785円(税込)

実際には具体的な案は何も持っていないかった。

小沢の街頭演説にはそれなりの迫力があり、「やらせ」でないホンモノの小沢コールが起ころうな場面もあったが、特定の熱狂的な支持者はいても、不特定多数を惹きつける現実政治家としての力量は持ち合わせていなかった。

小沢は投票直前の演説でも、拉致問題や、若者の就職難、地方への財源移譲など、たった15分の間にあれもこれもと並べてみせた。それは要するに、「この問題に言及してくれたら1票入れますよ」という議員にそれぞれ配慮し、サービズしたためにそうなったのである。財源を確保したうえで、の政策という本来の筋道はそっちのけで、大衆が望むものをすべて並べるといふ姿勢だった。

かつて、「日本改造計画」(93年、講談社刊)を書いたころの小沢は、徹底したりアリズムの政治家だった。消費税の税率を10%に上げて所得税、住民税率を半分とし、規制緩和で民間の活

力を引き出し、国連中心主義による「普通の国」になることを目指す、と書いた。

しかし、民主党の代表となつてからは「国民の生活が第一」となり、消費税増税はおろか、財源の裏付けがないバラ撒き、ポピュリズム的政策を並べるようになった。

私は、小沢がある時点で人気取りのポピュリズム政治家に変貌したというよりも、小沢がもともと持っていた複雑なバックグラウンドに、この変化の理由があると思う。

06年に出た対談本「90年代の証言 小沢一郎」(朝日新聞社刊)のなかで、小沢は、政治家としての自分の歴史的な出自を割合率直に語っている。

## 不徳の致すところ

60年安保で佐重喜は岸内閣の安保特別委員会の委員長を務めた。小沢はこのとき高校生(都立小石川高校3年)だったが、吉本隆明などの著書に触れ、当時の流行思想を吸収していたと

それによれば、典型的な自民党型政治家と思われる小沢の根っこには、実は社会民主主義に対する抜きがたい志向があるということがわかってくる。

小沢の父・佐重喜は岩手・水沢の農家の子として生まれ、上京して人力車夫などをしながら司法試験を突破し、弁護士となる。東京市会議員などを経て、戦後第1回目の総選挙で代議士となった苦勞人である。小沢はこの父親の生き様に、強い影響を受けた。

小沢は父・佐重喜について、「どちらかというとなら反体制的な考えだった。戦後の経済万能主義の社会や政治を嫌悪していた」と回想している。

いう。

安保改定反対という圧倒的な世論に対し、父が政府中枢において安保改定を推進していることに息子として非常に引け目を感じていた。小沢は父の勧めに従って

東大を受験するが2年続けて失敗(慶應大に進学)、さらに弁護士を目指し司法浪人で勉強を続けているときに父が急逝し、地盤を継いで立候補することになった。

自民党・田中派にわらじを脱ぎ、田中角栄・金丸信という二人の政治的師匠に任せ、その金権政治のもっとも近くにおいて骨がらみまで浸かりながら、92年の竹下派分裂後は連合の山岸章会長に接近し、その影響力を利用して、細川連立政権を作った。

地方の労働組合幹部ともパイプを保ち続けたし、自由党を経て民主党と合流して以降も、民主党内の旧社民勢力、労働運動出身者とは深い関係にあった。

いま、小沢一郎の盟友となつているのが日教組出身の奥石東(参院会長)だが、今回の代表選でも旧社民勢力は相当数が小沢支援に回つたと見られている。

小沢を、単に旧自民党金権政治の体質をそのまま持ち込んだ古いタイプの政治家と思うと、よく理解できない部分がある。

「在日米軍は、第7艦隊だけで十分じゃないか」と発言して物議を醸したことがあったが、旧自民・金権政治的な体質に、「大きな政府」を志向する社会民主主義的な部分、反安保などが渾然一体となった、

自民党と社会党の古い尻尾をともに持つ奇妙奇天烈な政治家——それが小沢一郎という存在なのである。小沢は昭和17年生まれだが、日本の戦後を生き抜いてきた世代独特の特殊な政治家といつてもいいかもしれない。今後おそらく、こういう政治家は出ないのではないか。

それでは、今後小沢はどのくらいの政治的パワーを維持し、どういう動きをするのか。それは、小沢が獲得した200という議員票の数がモノを言うと思う。なんだかんだ言つて、党内に200人も「小沢を総理にしたい」という勢力がいることを示したのは大きい。小沢側近の松木謙公が、「これで小沢一郎という政治家が終わったわけではない！」と言っていたが、党内

世論的にはその通りだろう。

今後普天間や、予算編成など何らかの場面で早晚菅政権が行き詰まることは確実だし、菅首相にそれを持ち切るだけの政策的裏打ちや政治家としてのパワーがないことは明らかだ。

そういう意味で、近い将来に再び小沢の出番が来るかもしれない。検察審査会の2回目の議決がまもなく出るが、仮に「起訴相当」と議決され、裁判が始まったとしても、一度は検察が立件を諦めた事件だから、裁判で

も無罪になる公算が大きい。そうなれば小沢は、また大手を振って「潔白」を主張し、「政治とカネ」の問題にけりをつけて政治の表舞台に立つことができる。

そう考えると、今回の「議員票で惜敗」という結果は、小沢にとつてプラスに働くのではないか。党内で一定の勢力を維持したまま、「出番」に備えることができるからだ。

しかし私は、党内勢力的にはしぶとく生き残ったとしても、小沢が今後歴史に

名を残すような大物政治家ではないということがすでにハッキリしたと思っ

る。小沢はこれまで極端にメディアを嫌い、自分から発言せず周囲に付度させることで存在感を高めてきた部分があるが、今回の選挙戦でいろいろ、いままで見えていなかったものが見えてきた部分がある。

菅・小沢の論戦を聞き、双方の主張や政策と称するものを聞いて、今日のこの複雑きわまる財政・金融・

国際環境に対応できる能力は、二人ともはやないと感じた。それほど低レベルの論戦だった。

菅首相が選挙前の演説で、「元気な日本を次の世代に引き継いでいきたい」と言ったが、もうトロイカ・ブラスワン（菅、小沢、鳩山由紀夫、輿石）なんて時代じゃない、本当に次の世代に渡すべきときだと感じた。その意味で、小沢は政治家として終わったということだろう。

もうひとつ、小沢の回り

にはいかに人がいないかということもハッキリした。

かつての後藤田のような知謀家はもちろん、閣僚として役に立ちそうな見識のある人物も見当たらない。彼の見識の不足を補うブレーンもない。なぜかいつも必ず人が離れていつてしま

まう。人間的に不徳の致すところなのではないかと思う。それはおそらく、彼の人間のどこかになにか根本的な欠点があるからではないか。  
(文中敬称略・談)